大東文化大学紀要　第３６号　１９９８年3月

万葉集に於ける漢字の用字法的研究（１）

－歌句漢字の不読文字「者」－

日 吉 盛 幸

On the Usages of 'Kanji-Jibo' in Manyoshu (1):

The character "者" in Waka-Phrases

HIYOSHI Moriyuki

はじめに

本稿は、さきの、西本願寺本を底本とした万葉集の全巻に使用されている漢字の異なり字母（種）について整理した「万葉集漢字字母集計表[1)]」と、またすでに「萬葉集に於ける全歌句漢字の用法的研究[2)]」の資料編として刊行している『万葉集表記別類句索引[3)]』と『万葉集歌句漢字総索引[4)]』上・下、『万葉集漢文漢字総索引[5)]』の三部の拙編著とに基づいたところの、万葉集の類句表記と全文字用例にそくした漢字字母の用字・用法的な考察である。

周知のように、万葉集の用字・用法研究は、鎌倉時代の建長５年１２月に仙覚が、時の後嵯峨上皇に奉った『仙覚律師奏覧状』（1253年）の中で「下僕見萬葉集歌、有四種書様。一者眞名假名、二者正字、三者假字、四者義讀也。」と歌句の漢字字母に関して４類に分類したのを嚆矢とする。ただし、仙覚自身はこの４分類について実例を挙げることをしなかったが、南北朝時代に至り由阿が『詞林采葉抄』第十（1366年）の中で「萬葉集書様」として仙覚の４分類を、　真名仮名、　正字〈　通正字、　別正字〉、　仮字〈　全仮字、　半仮字〉、　義読〈　全義読、　半義読〉の７種に実例を挙げて具体化した。江戸時代になると更に本格化し、春登上人が『万葉用字格』（1817年）に於いて、４類８種（延訓を除く）に分類するに至った。「○阿部」の１部分を例にとって図示すると、

- 仮字
  - 正音 …… 阿（ア）
  - 略音 …… 安（ア）
- 訓語
  - 正訓 …… 吾（ア）、期大王乃（ゴオホキミノ）・我（ア）、者不念寸（ハモハザリキ）・旦（アサ）、川渡（カハワタル）・海人（アマ）野島之（ヌジマノ）、ヽ乃（ノ）
  - 義訓 …… 妾（ア）、耳鴨（ノミカモ）・商（アキ）、島守（サキモリ）・朝烏（アサヒ）、ヽ指（サス）・丸雪（アラレ）、ヽ降（フリ）
  - 略訓 …… 網（ア）、子調流（コトヽノフル）・足（ア）、掻乎速（ガキヲハヤミ）
  - 約訓 …… 荒礒（アリソ）、ヽ乃上尓（ノウヘニ）・淡海（アフミ）、ヽ乃國之波宇の約（ノクニノ）・旦開（アサケ）今朝之（ケサノ）、ヽ

借訓 …… 余（ア）、跡川楊（ドカハヤナギ）假字也・阿白（アジロ）、、木尓（キニ）・味狭藍（アヂサヰ）木尚（キスラ）、、、紫陽花也

戯書 …… 山下（アラシ）、、ノ風尓（カゼニ）・下風（アラシ）山（ヤマ）ノ、、之（ノ）・阿下（ノフケバ）、、乃吹者

のようになる。「阿部」から「遠部」に至るまでの用字例を、その訓みに従って５０音順に列挙したもので、５５丁（Ａ５版１１０頁）に及ぶ万葉用字字典ともいえるものである。この分類には「塔」「餓鬼」「布施」などの字音語（外来語）を入れるべき位置がないとか、「略訓」と「約訓」の意義が不明確であるとか、音韻現象の問題と表記法とを混同しているとか（『新編古典全集１』1994年など）の批判も受けているが、複雑な万葉集の用字法を体系的に整理し、現在に於いてもその名称の多くが受け継がれている点で、用字研究の史的意義は大きいといえる。以後、鹿持雅澄『萬葉集古義』（「總論二」1835年）、高橋残夢『萬葉国字抄』(1848年)などの研究があるが、近世末の木村正辞『萬葉集訓義辨證』『萬葉集字音辨證』『萬葉集文字辨證』（1855年）のいわゆる３弁証は貴重であった。

昭和初期に正宗敦夫『萬葉集總索引』（1929年）が刊行されるといよいよその研究は盛んとなり、森本治吉「萬葉集の研究－用字法を中心として－」[6]（1931年）、澤瀉久孝『萬葉集序説』（1941年）、鶴久「万葉仮名」[7]（1977年）などの用字分類を基本に据えた研究、網羅的な用字研究の圧巻ともいうべき大野透『萬葉假名の研究』（1962年）、同『續萬葉假名の研究』（1977年）や稲岡耕二『萬葉表記論』（1976年）、更に小島憲之「万葉用字考証実例」[8]（1973年）、川端善明「万葉仮名の成立と展相」[9]（1975年）など典拠や文字表現に関する個々の論文は枚挙にいとまがないと言える。

かかる研究史上にあって、本稿の最終的なねらいは、殊に正宗敦夫『萬葉集總索引』「漢字篇」の「假名」、「假訓」、「訓義」、「音讀」の基本的な４分類を引き継いだ万葉集の類句表記と全文字用例にそくした字母の用字法的な認定をめざすものである。そして、その研究態度は大野透の、

> 本文整定は、　語音・語法・語彙、　諸本の信憑度、　用字の傾向・法則、の諸観点より行ふべきである。（前掲『續萬葉假名の研究』「萬葉集」p.238）
>
> 表記の研究は、内容・形式に亘り全體・部分の関係に着目して精密になされねばならない。透M19（日吉注－『萬葉集假名の研究』p.19）に「いかなる假名がいかなる表記體に於るいかなる語のいかなる部位に用ゐられてゐるか、その使用如何といふ関心」が必須な事を説いたが、表記の研究には、単に假名のみではなく字義をも含めた用字に関して同様の関心が必要である。（同p.267）

との方針に示唆を受けるところが大で、繰り返し述べられた指針に啓発されるものである。「いかなる假名」かは、信頼度の高い諸本の校異校訂作業に基づく本文の整定により確定し、「いかなる表記體に於るいかなる語のいかなる部位」に用いられているかは、歌句の原文表記のどのような語のどの位置にあるかによって検証すべきかを意味し、総じて漢字の３原則である義・音・形のうち字義を含めた用字への関心が肝要であるという。もとより、大野の精緻をきわめた上代文献を渉猟しての挙例に及ぶべくもないが、これを補う意味でも万葉集の用字研究に於いて、万葉集研究者の何人たりともその恩恵に浴さなかったものがいないであろう、正宗『萬葉集總索引』が殊更に重要であることは言うまでもないところだ。しかし、正宗『萬葉集總索引』の成立からすでに６０余年をへ、用字・用法的な研究の進展にともなって、万葉集の漢字字母の用字認定にはめざましい成果があるにもかかわら

ず、万葉集の全漢字字母について整理したものが正宗『漢字篇』を於いて他にないことは、用字研究史上に位置する斯界に於いて憂慮すべきことであると思う。加えて、『萬葉集總索引』や『校本萬葉集』（1924年～1994年）をはじめ、それまでの万葉集研究の底本の主流であった寛永版本に代わって、１９６５年代からの３０年間は西本願寺本が主流となっている。このような観点に於いて、西本願寺本を底本とした、いわば用字分類を施した『萬葉集總索引』「漢字篇」新編とでもいうべき書籍の刊行が望まれるところである。とは言え、管見によれば、「万葉集漢字字母集計表」[10]他で解明したように、万葉集の目録、歌句、歌句外（漢文漢字）をあわせた総字母（漢字の異なり字種）は約２５００文字を数え、総延べ字数は約１８１９００文字にも及ぶ。[11]従って、問題となる字母を拾いだし検討を加えるだけでも、前途はほど遠くかつ粗略で遅々たる歩みとなるが、全巻についての字母の概略を整理し終えたいま、順次、個々の字母事例について問題点を明らかにし、検討を深めてゆきたいと思う。『漢字篇』穂拾の一歩は、「万葉集漢字字母集計表」Code 1717の歌句漢字【者】の、いわゆる仮名用法についての問題をとり挙げてみる。

「者」字非サ仮名説続貂[12]

歌句漢字の「者」字は、２４０６字例確認できるかと思う。[13]まず、これらの字母用例をその用字別に分類するにあたって、便宜的に正宗『漢字篇』の　「假名」、　「假訓」、　「訓義」、　「音讀」の基本４分類をしたじきに据えると、歌句中の「者」字は、　「假名○サ、○ニ」、　「假訓○ハ」、　「訓義○ヒト、□○今－、○比－、○昔－、○廼－、○頃－」の３類に分けられている。「者」字に対して「假名」の分類項目のあることが問題となり、これを検証しようとするのである。もっとも、　の分類項目「假訓」には訓仮名が含まれており、「者」字の集中たった１例の訓仮名とみられる

字	原　文	訓　読	種別	巻	部	旧番	句番	作者等
者	○田為為寸	はだすすき	訓仮名	16	雜	3800	1	娘子７

の用例は対象外である（Code 1717【者】訓仮名）。

『漢字篇』「者」字の第１項目の「假名」は、次の如くである。

サ　苦－　○樂－　○長－　○遙－　○吉－　○ニ　中々－　○－《助》〔２へ〕

「サ」と「ニ」の仮名にあたるものがあるとするが、「ニ」のうちの後者、つまり「者」が《助》詞の「ニ」であるとした例は、『単語編』から推して「風流士者有」（　１２７）と「為家類時者」（　１８０９）の２例である。しかし、「風流士者有」は寛永版（寛）本に「～ニアル」、『古義』に「者」は「煮」の誤とし、やはり「～ニアル」とするが、西本願寺（西）本他伝本に「～ニハアル」とし、いわゆる「字余りの法則」からいっても「ミヤビヲニハアル」でなければならない。また、「為家類時者」は寛本にも「～トキニハ」であり、異訓が認められたとしても「～トキハ」（『新訓』『全註釋』『古典大系』『注釋』『釋注』など）であろう。従って、両例とも『漢字篇』次項の「假訓ハ」「○ニ－《助》」に含まれるべきもので、「者」が「ニ」と訓む事例にはなりにくいと判断する。他方、「ニ」

のうちの前者「中々者」については次節で改めて検討を加えることにしたい。

さて、『漢字篇』がサの仮名であると認定した「者」の用字は以下の　A　～　の諸例である。[14)] それにA　を加えてあるのは、『漢字篇』はその底本である寛本に「左」また、京都大学（京）本の左傍に「左ィ」とあるのに拠ったのであるが、元暦校（元）本他文西紀温矢京の諸本は「者」であり、ここは「いづれにもあるべ」（『古義』）き用例というよりも、むしろ諸本の信憑性からいって元西本などに拠り、「者」がサの音仮名であるのかどうかの認定は別として、　A　～　と同一の用字例であるとみなしたからの措置である（Code 1717【者】不読１）。

A	天に坐す月読壮子幣（まひ）は為む 今夜乃長 者（こよひのながさ○）	6	雑　985	湯原王
	言問はぬ木すら妹と兄とありといふをただ独り子に 有之 苦 者（あるがくるしさ○）	6	雑 1007	市原王
	秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の 音 遙 者（こゑのはるけさ○）	8	雑 1550	湯原王
	……うち靡く春見ましゆは夏草の茂くはあれど 今日之 樂 者（けふのたのしさ○）	9	雑 1753	虫麿歌集
	高松のこの峯も狭（せ）に笠立てて盈ち盛りたる 秋香乃吉者（あきのかのよさ○）	10	雑 2233	
	……千年寿き寿きとよもしゑらゑらに仕へ奉るを 見之 貴 者（みるがたふとさ○）	19	4266	大伴家持

６例中５例までが結句で、しかもその部位が末尾の１文字に位置していることがきわだつ。そこで、拙編『万葉集表記別類句索引』から歌句の原文の末尾１文字が１音節仮名表記で、しかもサに限定した音仮名か訓仮名にあたる句を抽出してみると、

	原　文	訓　読	巻	部	旧番	句番	作者等
B	有之乏左	あるがともしさ	4	相	634	5	娘子２
	有之乏左	あるがともしさ	7	雑	1208	5	古集？
	偁之苦沙	いふがくるしさ	7	譬	1339	5	
	念之吉沙	おもへるがよさ	10	雑	2073	5	
	聞之登聞思佐	きくがともしさ	8	雑	1561	5	大伴坂上郎女
	……〔左必之佐〕	(なきが)さびしさ	15	贈	3734	1005	中臣宅守　一云
	奈伎我佐夫之佐	なきがさぶしさ	15	贈	3734	5	中臣宅守
	宿之苦左	ぬるがくるしさ	8	相	1631	5	大伴家持
	待之苦沙	まつがくるしさ	12	寄	3008	5	
	不〻見之為便奈沙	みぬがすべなさ	4	相	757	5	大伴田村大嬢
	見之悲左	みるがかなしさ	4	相	556	5	賀茂女王
	見何明沙	みるがさやけさ	9	雑	1737	5	虫麿歌集？　兵部川原
	見流我等母之佐	みるがともしさ	15	遣	3658	5	
	美流我登毛之佐	みるがともしさ	20	防	4425	4	昔年　磐余諸君抄写
	由久我加奈之佐	ゆくがかなしさ	20	防	4338	5	駿河　生部道麿
C	礒之清左	いそのさやけさ	7	雑	1201	5	古集？
	絲乃細紗	いとのくはしさ	10	雑	1851	2	

	音之清左	おとのさやけさ	3	雑	314	4	波多小足
	音之清左	おとのさやけさ	7	雑	1112	5	
	音之清羅	おとのさやけさ	7	雑	1159	5	古集？
	音清左	おとのさやけさ	9	雑	1724	4	人麿謌集　島足
	音乃遙左	おとのはるけさ	10	雑	1952	5	
	今日之貴左	けふのたふとさ	19		4255	5	大伴家持
	言乃宜左	ことのよろしさ	3	雑	339	5	大伴旅人
	音之亮左	こゑのさやけさ	10	雑	2141	5	
	聲之遙佐	こゑのはるけさ	8	雑	1494	5	大伴家持
	人之悲紗	ひとのかなしさ	13	挽	3337	5	
	比等能等母斯佐	ひとのともしさ	5	雑	863	5	大伴旅人？　後人
	月清左	つきのさやけさ	7	雑	1076	5	
	須流須邊乃奈左	するすべのなさ	17		3928	5	大伴坂上郎女
D	安夜尓可奈思佐	あやにかなしさ	14	相	3462	5	国不明
	安夜尓貴左	あやにたふとさ	19		4254	45	大伴家持
	〔波ゝ我迦奈斯佐〕	ははがかなしさ	5	雑	890	1005	山上憶良　一云
	伊母我可奈思佐	いもがかなしさ	15	贈	3727	5	中臣宅守
	伊母賀加奈志作	いもがかなしさ	20	防	4391	5	下総　忍海部五百麿
	見者悲沙	みればかなしさ	6	雑	982	5	大伴坂上郎女
	聞者悲左	きけばかなしさ	19		4211	14	大伴家持
	須別毛須別那左	すべもすべなさ	5	雑	796	5	山上憶良
	須敝母須敝奈佐	すべもすべなさ	18		4106	51	大伴家持

と　B～Dグループ全３９例が存在し、原文の末尾１文字に使用されているサ仮名は「左・佐・沙・紗・作・羅」の６種の字種を数え、やはり短歌の結句に集中（82.1%）し、　B、C、Dすべてのパターンに大伴家持の用例（計６例）があることは留意してよい。因みに、　C　「羅」（Code 1692【羅】）字は本来サの音節をもたないが、「羅」は舶来のうすぎぬを表す字で「紗」と実質的に共通するところがあるため、「紗」がサの音仮名に用いられているのと同様に、サの訓仮名として用いた（『代匠記』『注釋』）とする通説によったもので、　C　～　類句「おとのさやけさ」の観点からも妥当であるといえる。

当該の　A　、　が、資料として抽出した　Bグループ１５例の「用言の連体形＋ガ＋形容詞語幹＋サ」の内容と形式にわたり同じで「～することがしかじかだ」の意の慣用句（『旧古典全集』　１００７頭注）であることは明白であるから、　A　「～ガクルシサ」　A　「～ガタフトサ」と施訓することに諸注異論はないところだ。更に、Aのその他の事例についても、　C１５例「～ノ＋形容詞語幹＋サ」の仮名書例によって、　Aにルビをあてたように施訓できよう。

これら　B～Dの「左・佐・沙・紗・羅」のサ仮名書例から短絡的に　A　～　の文字列を結びつけると、殊に　A　「見之貴者」と　B　「宿之苦左」はともに大伴家持による訓字主体表記歌であるから、一見「者」字が、サの仮名に比定しているかにみえなくもない。こうした見方の一つの表れ方が、版本や古注釈時代のみならず写本時代にもあって、　A　の㊀本本文の左傍に「左ィ」とあったのは、異本本文が「者」ではなくて「左」であるとした異本書写者の改竄的な所作とみなしうる。

ところで、「者」の日本漢字音シャは「沙・紗」のサ仮名の例をひくまでもなくサの仮名になる要素を十分に持ちえている。そこから、版本時代の施訓を引き継ぐかたちで、今日でも『漢字篇』同様万葉集の万葉仮名に「者」をサの仮名として認定しているものも少なくないのである。例えば、代表的なものに、

- 「奈良時代の音節及び万葉仮名一覧」(『古典大系１』1957年所収)
- 「主要万葉仮名一覧表」(『時代別国語大辞典上代編』1967年所収)
- 『續萬葉假名の研究』(1977年ｐ.４０２)
- 「万葉仮名一覧」(講談社『古語辞典』1969年・桜楓社『必携万葉集要覧』1976年・講談社　『萬葉集事典』1985年・和泉書院『万葉事始』1995年所収)

などを挙げることができよう。積極的に「者」字にサ仮名を認めない現行諸本でも、印刷技術上からの問題もあってかルビの位置が「～者(さ)」のように付けられている場合が多く、やはり「者」がサの仮名であるようにもみえる。

しかしながら、類句の観点に基づいた下記の用例で、

H	愛(うるは)しと思ふ吾妹を夢(いめ)に見て起きて探るに無之不怜	12 正 2914	
	母(おも)父も妻も子どもも高々に来むと待つらむ人乃悲	13 挽 3340	或本歌　調使首
	……秋の夜の　百夜乃長(ももよのながさ)　ありこせぬかも	4 相　546	笠金村
	大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音乃(おとの)清(さやけさ)○也	7 雑 1102	(「也」－㊀「左」)
	さざれ波浮きて流るる泊瀬川寄るべき磯の無蚊不怜(なきがさぶしさ)○也	13 雑 3226	
	難波辺に人の行ければ後れ居て春菜採む児を見之(みるが)悲(かなしさ)○也	8 雑 1442	丹比屋主

H　～　は、歌句の原文の末尾１文字にサ仮名が無表記であっも、　B　、　C　に挙げたように、

H　無之不怜　……　　B　奈伎我佐夫之佐　　なきがさぶしさ

H　人乃悲　　……　　C　人之悲紗　　ひとのかなしさ

「～さ」を訓み添えて訓まなければならないことは自明のことであり、これは、　H　「百夜乃長」についても同様である。翻って、　H　～　には和歌の結句の末尾１文字に「也」字(Code 0035【也】不読１)を表記しているが、この「～也」を含む歌句全体が、　H　「也」が紀州(㊀)本では「左」と書写されていることをあわせ考えても、やはり、ルビを付したように「～さ」で終わって訓まれるべきものである。しかし、だからといって「也」がサの音節を表す仮名であろうはずもない。漢文の語末助字(語已辞)の「也」の用法を和歌表記に応用したものであるとみなければ、解決できないであろう。[15)]

要するに、　Ｈ　～　の「～也」の歌句例が端的に示すように、　Ａ　～　の「～者」も　Ａ　を除いて結句の用例で、少なくともすべてが歌句の末尾であり、けっしてサの仮名として表記されたものではない。漢文の語末助字（語已辞）の用法を和歌表記に応用したものであると考えるべきものである。[16]『新編古典全集３』（1995年）は　Ａ　～　の「者」には注記せずに、　Ａ　の「秋香乃吉者（あきのかのよさ）」　２２３３の頭注に「原文末の『者』は助字だが、サの音仮名としての働きをも示している」と注記している。和歌表記に於ける文字の視覚性を重視すればあるいはこのようにも言えるのであろうが、それでは、　Ｈ　～　の無表記の場合や、　Ｈ　～　の「～也」の場合の説明がつきにくいことになる。歌中の表現からひき起こされる文字の意義や字音の連想と字母の用字認定とは区別されるべきで、やはり「者」字を万葉集の「万葉仮名一覧」からは、除外するべきであろうと考える。

「中〻者」私見

さて次に、もう一つの仮名事例とした「〇ニ」「中々者」は、集中１種１例のみの表記例であり、

・中〻者　黙（もだ）もあらましを何（なに）すとか相見（あひみ）そめけむ遂げざらまくに　　4 相　612 大伴家持

大伴家持の作歌である。「ナカナカニ」の表記に「者」をあてたとは考えにくいことを考慮して、『定本』（1940年）、『全註釋』（1957年）、最近では角川『校訂』（1995年）が、表記字面にそくして「なかなかは」と訓むが、孤例となり類句をもたない。むろん孤例で類句をもたないからといってこの訓を否定するべきではない。しかし「なかなかに」ならば、以下の資料　Ａ　～

	原　文	巻	部	旧番	句番	作者等	異同
Ａ	奈加奈可尓	17		3934	1	平群女郎	
	中〻二	9	相	1792	3	福麿歌集	
	中〻二	11	寄	2743	1		
	中〻二	12	正	2899	1		
	中〻二	12	正	2940	1		
	中〻二	12	寄	3033	1		
	中〻二	12	寄	3086	1		
	中〻尓	3	雑	343	1	大伴旅人	
	中〻尓	4	相	681	1	大伴家持	
	中〻尓	11	寄	2743	1001	或本歌曰	
	中〻荷	4	相	750	3	大伴家持	（荷㭍－尓）
	中〻	11	正	2392	1	人麿哥集	

のように「奈加奈可尓」「中〻二」「中〻尓」「中〻荷」「中〻」の５種の表記例と１２句例の類句をもち、家持自身が２度使用しているので、できれば「なかなかに」と訓み「ナカは中途・半ぱの意のナカであり、これを重ねて助詞ニがついて副詞化したものである」（『時代別国語大辞典上代編』1967年）

とみたいところだが、はたして、「に」の表記に「者」字をあてたかどうかは、古来おおいに問題とするところである。

すなわち、夙に『拾穂抄』（1686年）本文に「中中煮」とあり、続く『童蒙抄』（1725年）に詳しく、

中々者　此者の字古一本に爾に記せり。しかれば爾の字正字歟。もしくは煮の字の火を脱したるか。尤者の字にても者也とつゞく字なればなりと訓ずる故、なりを又約すればにとよむべき事也。集中に者の字を用ゐて、にとよませたる歌あまたあるを、此約言を不知人點を加へしより、みなはとよませたり。これは、點の誤にて、此所に中々者とあるを集中の語ともすべき事也。中々はといふ詞はなき事なれば、これ者の字を記してにとよむの一證ともすべき事也。（傍点稿者）

とし、「此者の字古一本に爾に記せり」と指摘したごとく、仙覚本系西温矢京本の左傍に「尒六条本」の注記をみる。六条本は二条院御本と同系で、それまで万葉集の原文に対する付訓は本文の次に別提であったものを、仙覚本以降現代諸本に至るまで訓点仮名を漢字の右傍につける体裁を受け継いだ祖本となった写本である（『校本萬葉集』首巻1931年）から、「なかなかに」の古訓から「尒」をあてたものと考えられるが、現存しない。『(新旧)新校』(新版1977年)、『(新旧)古典全書』(新訂1973年)は、この六条本によって「尒」を採用してる。ただし、仙覚本系諸本の書き入れ以外に現存諸伝本の本文に「尒」とあるものをみないのが難点となる。そこで、㈠「者」が「爾」か「煮」の誤字であるのか、または㈡「者」の字をそのまま「に」と訓むことができるかとする検討が必要となる。『漢字篇』は㈡を受けたことになるが、『童蒙抄』にいう「者の字を記してにとよむの一證と」する根拠の「約言」には無理があることから、「中々はといふ詞はなき事」だが、上述したように『定本』他が「六條本も校勘資料としては、そう高い位置を占めるものでもない」（『全註釋』）ことを理由に「なかなかは」と訓んだわけである。

一方、すでに『拾穂抄』本文に「煮」とし、『童蒙抄』の別案に「もしくは煮の字の火を脱したるか」とした㈠誤字説も『考』（1768年）、『攷証』（1828年）などに継承され、現代諸注の中でも岩波『古典大系』本、稲岡耕二『校注』（明治書院1979年）が『童蒙抄』によって「煮」の誤字説を採用したのは留意すべきである。

「煑」（「煮」）は集中、目録０、歌句５、歌句外１の合計６例（Code 1338【煑】）存在するが、仮名としては、訓仮名で以下の２例である。

煑	常處女○手	とこをとめにて	訓仮名	1 雑	22	5	吹芡刀自
煑	鹿○藻闕二毛	かにもかくにも	訓仮名	4 相	628	4	佐伯赤麿

助詞と副詞的用法であるが、いずれも他の訓仮名との連（続）字的用字である。『古典大系』本が敢えて「煑」の誤字説を採用したのは、すでに資料Ａ　で挙げたように、同じ巻４で大伴家持に「なかなかに」の用例があり、しかも、　Ａ　の家持歌には「中〻荷」と、「～に」に「煑」と同様に訓仮名「荷」を使用しているからの措置であると思われる。更に推測を逞しくすれば、　Ａ　は仙覚諸本系には「尒」であったものを桂宮（桂）本によって「荷」に改めたものであった。すると、現存伝本には存在しないが仙覚諸本系に「尒六条本」の書き入れがあったのと相対的に

「中〻者」（現存本）＜「煮」－「中〻尒」（仙覚本書き入れ六条本）　　６１２

A　「中〻荷」（桂宮本）　　－「中〻尒」（仙覚本）　　７５０

という関係が成立する。つまり、本来「中〻煮」であったものが、続く第２句目「黙毛有益乎」と連続して「煮黙」と連火（四つ点）であったため、「煮」の連火を書き漏らし「者」となったものであるとも想像できなくはない。しかし、もとよりこの考えは六条本、ないしは『童蒙抄』以来の誤字説に立脚しての一つの私見を述べたに過ぎず、新出の広瀬本等を勘案しても、所詮誤字説の域を脱するものではないと判断する。

ところで、実は岩波『古典大系』本が出版される１年前に、この問題を正面から解決しようと試みた論が提出されていた。鶴久「万葉集における〈者〉字の用法－〈中々者〉の訓をめぐって－」[17]（1956年）である。要約を最近改稿されたとみられる論考の結論部から引用すると、

> 単に「中中」だけでナカナカニと訓み得るわけで、者字は「中中」を強調した漢文の助字と解して始めて色々の難点が一掃される。作者家持には、前記した「幸也（さきはひにも）」「辱也（かたじけなくも）」の例もさることながら「是日也白雪勿降……此時也復漁夫之船入海浮瀾（３９６１左注）」「打霧（うちきらひ）之（１４４１）」の如き之・也の不読の助字を使用する傾向が看取され、文末を強調する不読の助字も、也に止まらず焉・矣・者・者也等と多彩を極め、家持の用字意識・文字用法の傾向を伺ふに十分であり、この場合の者字を漢文の助字として解することは何ら差支へないと考へられる。逆に、者を漢文の助字と解することにより、家持の用字意識をより一層具体的に把握できるのではないかと思ふ。（『萬葉集訓法の研究』1995年所収による。）

と、「家持の用字意識・文字用法の傾向」からも、この「者」字を不読の助字であると結論づけるに至っている。前節で明らかにした和歌表記中の語末助字としての「者」字同様に、あらたに、副詞的用法、それも時間的用語以外に付置した「不読の助字」説を提唱したわけである。

この鶴「不読の助字」説旧稿に対して、大野透は

> （鶴は）萬葉集に於る不讀字者の他の例（[形容詞語幹＋サ］以外）を示さうとしたが從ひ難い。漢文の者字は、時間・空間の或範圍を表す語句の直後に置かれて指示強調する機能は有するが、普通の副詞を強調する如き機能は恐らく有してゐないので、中中者に就ての所説は認め難い。中中者は恐らく中中煮の誤寫である。（『新訂萬葉假名の研究』p.5）（括弧内稿者）

と批判し誤字説を主張している。「不読の助字」説を否定したのは『古典全集』（1971年）、『新編古典全集』（1994年）の編者の一人でもある木下正俊『全注巻四』（1983年）も同じで

> 「中中」だけでもナカナカニと読ませた例（　2392）もある、と言われるが、無理なように思われる。（傍点稿者）

と鶴の「単に〈中中〉だけでナカナカニと訓み得るわけ」だけでは「無理」だという。木下『全注』は「ナカナカニ」と訓む一方で、不読の助字説が「無理」であるとする詳しい根拠や説明をしていない。鶴説に難点があるとすれば、「家持の用字意識・文字用法の傾向」といって挙げた事例のほとんどが、結論部に於いて、漢文漢字での語末助字としての用法であったからであろう。

すなわち、集中の漢文漢字の用例ならば、不読の助字と確認できる「者」字の用法は、家持に限ったことではなく、

B	右、日本紀曰、三年己丑正月、天皇幸㆓吉野宮㆒……四月幸㆓吉野宮㆒者。	1	雑	39 左
	亦曰、……仍移㆓太娘皇女於伊豫㆒者。	2	相	90 左
	因㆘此馳駅上奏、望㆓請庶弟稲公姪胡麿㆒欲㆘語㆓遺言㆒者。	4	相	567 左
	此云㆓山多豆㆒者、是今造木者也。	2	相	90 歌脚
	号曰㆓大城㆒者也。	10	雑	2197 歌脚
	穂積朝臣老配㆓於佐渡㆒之時作歌者也。	13	雑	3241 左
	撿㆓古事記㆒曰、件歌者、木梨之輕太子自死之時所㆘作者也。	13	相	3263 左
	即云、兵部丞大原真人今城先日他所讀歌者也。	20		4459 左

など語末助字として頻出するのである。また、家持には不読の「也」の用法がみられるというが、この場合も「是日也白雪勿降……」「此時也復漁夫之船……」は語末ではないが、漢文漢字中である。それどころか、歌句に於ける不読の「也」（Code 0035【也】不読２）ついては、前節　H　～　で挙げた他に、

C	伊布可思美為也	いふかしみする	12	問 3106	5
	君乎社待也	きみをこそまて	10	相 2349	5
	夕霧乃如也	ゆふぎりのごと	2	挽　217	34　柿本人麿
	戀許増益也	こひこそまされ	10	相 2269	5
	朝露乃如也	あさつゆのごと	2	挽　217	33　柿本人麿
	汝者如何念也	なはいかにおもふ	13	問 3309	13　人麿謌集之歌
	黄葉早續也	もみちはやつげ	8	雑 1536	5　縁達師

「～也」７例をみるが、家持の歌々が仮名主体表記歌巻に集中するとはいえ、家持歌にその例を全くみないのである。加えて、歌句で挙げた「～之」１例も、鶴は「打霧之（　１４４１）」と訓んで「之」を不読の助字としたが、[18] 旧訓以来、木下のかかわった諸本も含めて、「ウチキラシ」と訓むのが一般的で、「～之」を不読の助字としたのは鶴の私説なのである。

それにもかかわらず、結論からいえば、鶴「不読の助字」説は支持されなければならない。古注釈に端を発し、『古典大系』本や大野『新訂萬葉假名の研究』や稲岡『校注』やが誤字説を踏襲し、角川『校訂』他が「なかなかは」と訓み、木下『全注』がその説明に窮したまま「ナカナカニ」と施訓したように、われわれにはもはや「中〻者」に対する新たな検討を加える余地は残されていないかのようにみえる。が、ここで改めて鶴の「逆に、者を漢文の助字と解することにより、家持の用字意識をより一層具体的に把握できる」という発言に注目したい。つまり、「家持の文字用法の傾向」から説き明かすのではなく、家持の用字意識の形成のいわば出発点を、ここの「中〻者」にみるのである。なぜここのこの句で使用したのか、あるいは、この歌はどういう位置にあるのかが重要となってくるのである。すでに述べたように、家持には「ナカナカニ」の用例が同じ巻４に「中〻尓」、「中〻荷」

と２例あり、作歌順の配列でいえばこの「中〻者」が最初となるが、何故に最初の作歌に「中〻者」を敢えて用いたかをもう一度問い直さなければならないのである。すなわち、この歌が、笠郎女が家持に贈った２４首中の最後に位置する「右の二首は、相別れて後に更に来贈る」と左注のある2首にのみに和えた歌の、２首のうちの２首目であることに着目したいのである。笠郎女の歌は、２２首に続けて、

D　従〻情毛　我者不〻念寸　又更　吾故郷尒　将レ還来レ者　（　６０９）
　　近有者　雖〻不〻見在乎　弥遠　君之伊座者　有不勝自　（　６１０）

とあり、これに家持の「大伴宿祢家持和歌二首」

　　今更　妹尒将〻相八跡　念可聞　幾許吾胸　欝悒将〻有　（　６１１）
　　中〻者　黙毛有益乎　何為跡香　相見始兼　不〻遂尒　（　６１２）

が続く。　D　の「我者不〻念寸」に対し、　が「妹尒将〻相八跡　念可聞」で対応し、　の「雖〻不〻見在乎」に対し、　は「黙毛有益乎」とともに２句切れで対応する贈答歌の形式をとった形となっているのである。そして、この対応関係は、和歌の内容上の関係では希薄となるが、ルビを取り去れば一層明らかになるように、　の「又更」に対し、　の「今更」と２字で、　の「近有者」に対し　の「中〻者」と初句の３字で文字表記にも反映しているとみるのである。　　の「～更に」の「に」はともに訓み添え、　と　の初句がともに「～ニ」の音節であったため、　の「近有者」３文字目で使用した「者」に不読の用法があることを十分に承知した上で、　に「中〻者」と３文字で対応させたのである。更に、　　と　　の対応関係は、　に「中〻者」の１文字目の「中」が　の「近有者」の１文字目の「近」と無縁ではないところにも働いているのである。すなわち、郎女の　の歌の「もし近くに居るならば」と「いよいよ遠くへあなたが」の「近」「遠」に対しても、家持は、　の１文字目に「中」の文字で始まる歌を意識的に置き、第４句目の「吾」[19]、結句の「将」「不」の対応もけっして偶然ではないのである。

　そもそも不読の「者」には語末助字としての用法の他に、すでに多少述べたが時間的用語に付置する副詞用法がある。例えば、『古事記』（西宮おうふう本による）の

E　此稲羽之素兎者也。於レ今者レ　謂レ兎神レ也。　（『神代記』）
　　所〻謂久延毗古者、於レ今者レ山田之曽富騰者也。　（『神代記』）
　　故、号レ其地レ謂レ楯津レ。於レ今者レ云レ日下之蓼津レ也。　（『神武記』）
　　自レ今者レ行廻而、背負〻日以撃。　（『神武記』）

４例のうち　～　の「於レ今者レ」が、

F　故、其一尋和迩者、於〻今謂レ佐比持神レ也。　（『神代記』）
　　即著火焼。故、於〻今謂レ焼遺レ也。　（『景行記』）
　　号レ御食津大神レ。故、於〻今謂レ氣比大神レ也。　（『仲哀記』）

「於〻今」と同じで、「於今者とあるは、たゞ伊麻と云に添たるなれば、別に者字はよむまじき」（『記傳』[14]）不読の助字用法であった。万葉集にも

G　昔者有㆓娘子㆒曰㆓櫻兒㆒也。　16 雜 3786 前文

昔者有㆓士與㆓美女㆒也．姓名未詳。　16 雜 3803 前文

昔者有㆓壯士㆒新成㆓婚礼㆒也。　16 雜 3804 前文

H　昔者之　舊堤者年深み池のなぎさに水草生ひにけり　（　３７８山部赤人）

昔者之　事波不知乎われ見ても久しくなりぬ天の香久山　（　１０９６）

と　Gは漢文漢字中の「むかし」、　Hは歌句中の「いにしへの」の不読の助字用法（Code 1717【者】不読２）であり、『漢字篇』　「訓義」に分類されている熟字訓の「ころ」「このころ」に「頃者」「廼者」「比者」と表記する

I	不合頃○	あはぬこのころ	4 相 713	5	丹波大女娘子
	頃○之	このころの	8 雜 1603	1	大伴家持
	菟楯頃○	うたてこのころ	10 雜 1889	5	
	戀頃○	こふるこのころ	10 相 2335	5	
	不相頃○鴨	あはぬころかも	11 寄 2745	5	
	頃○之間	このころのあひだ	12 寄 3022	5	
	不所見頃○	みえぬこのころ	12 寄 3052	5	
	頃○名寸	このころはなき	12 寄 3069	5	
	頃○之	このころの	16 雜 3859	1	
	廼○之	このころの	10 相 1984	1	
	比○不聞而	このころきかずて	3 雜 236	4	持統天皇．文武？
	止息比○鴨	よどむころかも	4 相 630	5	佐伯赤麿
	比○之	このころの	10 雜 2213	1	
	繁比○	しげきこのころ	11 旋 2366	6	古歌集
	比○之	このころの	11 正 2525	3	
	不所見比○鴨	みえぬころかも	12 寄 2972	5	

１６例も同様な用法（Code 1717【者】不読３）であり、[20]この中の　は家持の使用例である。

要するに、鶴「家持の用字意識・文字用法の傾向」を形づくる「中〻者」の「者」字不読説は、積極的に首肯されるべきものであり、家持は「者」に不読の用法が十分にあることを承知した上で、笠郎女作歌の２首目の初句「近有者（ちかくあらば）」に文字表記上の技巧を加味して、同じ２首目の初句に意識的に「中（なか）〻者（なかに）」と３文字で和えたものである。そして、それは「近」「遠」「中」の文字遣いとも関係があり、誤字説はもちろん、「なかなかは」と訓むとする説もあたらないと考えるのである。加えて、このD　「中〻者」の歌は、　A　で挙げた「中〻二」

・なかなかに黙然（もだ）もあらましを　あづきなく相見始めても吾は恋ふるか　（　２８９９）

と類歌の関係にあることも見逃してはならないと思う。家持の歌が天平６～８年で１７～１９歳ごろの作だとすると、あるいはこの時すでに巻１２の歌の類想があった上で、恐らくは、年長で作歌に長

じた笠郎女に対する和歌として、郎女の歌に使用している「更」「乎」「吾」「将」「不」などの文字を２首が対応するように散りばめ、ことのほか文字表記に技巧を凝らしたものと思われるのである。

おわりに

歌句漢字「者」２４０６例のうち正宗『萬葉集總索引』「漢字篇」の「者」字の第１項目の「假名」用法の事例に限って、「〈者〉字非サ仮名説続貂」、「〈中〻者〉私見」の２節に分けて検討を試みた。いずれも、先学の「不読の助字」説によるところが大きいものだが、万葉集に於いて「者」字に音仮名としての用法は認められないと判断する。[21] 更に敷衍して言えば、古来難問であった「中〻者」の「者」は、「ニ」仮名でないことはもちろんであるが、「煮」とする誤字説や「ハ」と訓むとする説は不当であり、歌句漢字表記に於ける不読助字の１用法であった。そして、それは家持の文字表記による技巧的な所作によるものであり、類歌や歌群の構成を検討することでより明確になったと言える。

因みに、歌句漢字「者」の98.7%は、国語の助詞「～は」「～ば」を表記する（２３７５例）のに使用されているが、仮名用法との関係から、本稿で触れなかった用例と今後検討を要すべき用例とを以下に示しておく。

	目録	歌句	漢文	合計	頻度率	順位
Code 1717【者】	9	2406	170	2585	1.42	5

字	原　文	訓　読	種　別	巻	部	旧番	句番	作者等
者	或○之	あるひとの	正訓漢字	10	相	2302	1	
者	黄葉早○	(もみちははやく)	定訓を得ず	10	雑	2217	2	初句に異同あり。
者	神競○	？？？	定訓を得ず	10	雑	2033	4	人麿謌集
者	成○之寸丹	？？？？？	定訓を得ず	16	雑	3791	45	竹取翁
者	春○来良芝	はるはきぬらし	不読説あり	10	雑	1814	5	人麿謌集
者	直相及○	ただにあふまでは	不読説あり	12	正	2919	5	
者	直相左右○	ただにあふまでは	不読説あり	4	相	747	4	大伴家持
者	春去来○	はるさりにけり	不読助字か	10	雑	1832	2	
者	今案不可言之いもにより○			13	相	3284	左	

なお、最後尾の用例は諸本歌句の原文とし、拙編『万葉集表記別類句索引』『万葉集歌句漢字総索引』も同じであったが、拙編『万葉集漢文漢字総索引』と拙稿「万葉集漢字字母集計表」とが歌句漢字の「者」から除外し、漢文漢字の用例としたものである。

＊

注

１）拙稿「万葉集漢字字母集計表」『大東文化大学紀要第３４号〈人文科学〉』1996年３月。

２）稿者「1990年度大東文化大学国内研究」課題。

３）拙編『万葉集表記別類句索引』笠間書院1992年。

４）拙編『万葉集歌句漢字総索引』（上・下）桜楓社1992年。

５）拙編『万葉集漢文漢字総索引』笠間書院1994年。

６）森本治吉「萬葉集の研究－用字法を中心として－」岩波講座『日本文学』1931年。

７）鶴久「万葉仮名」岩波講座『日本語８』1977年。

８）小島憲之「万葉用字考証実例」（一）～（四）『万葉集研究』塙書房1973年～1978年。

９）川端善明「万葉仮名の成立と展相」上田正昭編『文字』社会思想社1975年。

10）拙稿「万葉集全歌句漢字巻別字母集計表」『大東文化大学紀要第29号〈人文科学〉』1991年３月。
拙稿「万葉集歌句外漢字巻別字母集計表」『大東文化大学紀要第32号〈人文科学〉』1994年３月。

11）拙稿「万葉集の表記－巻五に関連して－」林田正男編『筑紫古典文学の世界〈上代・中古編〉』1997年９月に「万葉集２０巻の字数と字種」の相関図表を掲載する。

12）安藤正次「萬葉集人の用字意識から見た〈者〉字の一研究」『奈良文化』第２２号1932年４月。

13）歌句漢字全「者」字の校異は、拙編『万葉集歌句漢字総索引』下巻ｐ.2338に掲載する。

14）注12）の安藤論文以前、木村正辞『萬葉集字音辨證』下巻は、　Ａ　～　を挙げ「者は、漢字ノ原音シャ、次音サなり」とし悉曇文字との関係を説く。

15）本居宣長「訓法の事」「『也』たゞ漢文の助字に用ひたり、其中に、那理と云て宜き處に置たるが多きなり、……萬葉にも此字は、ヤの假字に用ひたるのみなり」『古事記傳一之巻』1790年。

16）注12）の安藤論文に「者」字に関する、王引之『經傳釋詞』巻九「者猶㆑也也」、劉武仲『助字辨略』巻三「此者字語已辭也」の指摘をみる(『辭書字典集成』1981年、参看)。

17）鶴久「万葉集における〈者〉字の用法－〈中々者〉の訓をめぐって－」『萬葉２１号』1956年10月、『萬葉集訓法の研究』おうふう1995年所収。

18）鶴久「『天霧之』の訓について」『語文研究２号』1995年５月、『萬葉集訓法の研究』おうふう1995年所収。なお、稿者は本稿の論証とは別に、「天霧之」を「アマギラヒ」、「打霧之」を「ウチキラヒ」と訓むとする説は十分に説得力があり、これを支持する立場にあることを付け加えておきたい。

19）『新編古典全集１』は第４句目の原文「吾故郷尒」を「我故郷尒」とするが、「校訂付記」を欠く。諸本に異同なく『旧古典全集１』も「吾故郷尒」であるので、第２句「我者不㆑念寸」の「我」にひかれた誤植とみられる。郎女歌は「我者（われは）」に対する変字意識で「吾故郷（わが）」とし、これに家持が同じ第４句に「吾胸（あがむね）」と文字技巧上和えたものであろう。

20）山田『講義』に「〈比者〉を〈このごろ〉とよむは元来〈比〉一字にて〈近来〉の意を有するに基づく。……〈比者〉の〈者〉は〈近者〉〈頃者〉〈今者〉〈昔者〉の〈者〉と同じく時の副詞を構成 する助辭たり。さて〈比者〉を〈コノゴロ〉の義に用ゐたるは六朝時代の俗語と見

えて、当時の尺牘に見えたり。たとへば、王羲之の〈積行凝寒帖〉に〈比者悠々、如何可。言〉とあるが如きこれなり。」とある。

21）鶴久は、注17）に於いて「者字を音假名〈サ〉に當てて表記した確實な唯一の例」は、正倉院文書（天平７年）の「達者牛甘」（『大日本古文書七巻40頁』）の人名のみであるとする。これとは対照的に、大野透は『續萬葉假名の研究ｐ.107』「大日本古文書」で「者は達者（七40)に１例見えるのみである。達者牛甘は達沙牛甘（牛養）に當たるので、者がサの假名なる事を認め得るのである。」とし、本稿４頁　Ａ　～　の４例のみ万葉集の「者」字にサ音仮名を認める立場にある『續萬葉假名の研究ｐ.402』「萬葉集」。

＊

付記　本稿の作成には、日吉盛幸（文学部日本文学科）・渡邉義浩（文学部中国文学科）２名による平成９年度～平成11年度大東文化大学特別研究（「アジア系文字処理の研究」）費にかかわる助成を受けていることを明記する。

＊

追記　本稿投稿ののち、稲岡耕二著『萬葉集（一)』（和歌文学大系１、明治書院1997年６月25日発行）に接し、本稿後節「〈中〻者〉私見」では、氏の旧著『萬葉集（一)』（校注古典叢書、明治書院1979年）によって、氏が誤字説を主張される側として論じましたが、新著の和歌文学大系本によって、氏の現在のお考えが不読説であることを追記とします。